SECO
茨城県海外子女教育
国際理解教育研究会

会　長　あ　い　さ　つ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会
会長　　細野　泰也

２年前のアメリカでの同時多発テロは，全世界の人に大きな衝撃を与えたと同時に，日本だけの視野に立つ世界観を大きく変える引き金になった。その後，「日朝首脳会談」「イラク戦争」「６か国協議」等，世界の情勢は大きく変化し，ある意味では，一極化し，逆に多極化へと変わってきている。これらの変化の最大の原因は『宗教』であろう。我々が，今まで文明，政治，経済等について持っていた世界観を変えるべき時代に入ったのだ。よって，我々全員一人ひとりが，日本人として，この変化の流れをどうとらえて，自分の教育の姿勢に生かすかが大切になってきた。また，マスコミによって全世界の国々へ，同時に事件が報道され，映像が流される時代でもあるので，我々全員の貴重な体験こそが，国際理解への『原点』となる。

ユネスコの「２１世紀教育国際委員会」での報告書に「学習に秘められた宝」として「学習の４本柱」が記述されている。第１に「知ることを学ぶ」，第２に「なす事で学ぶ」，第３に「他者と共に生きることを学ぶ」，第４に，３本の柱から「人間として生きることを学ぶ」である。県内２２０名余の会員が，海外生活を体験したり，体験しつつある事実こそ，ユネスコがいう「学習の４本柱」の実践につながる。会員一人ひとりの『生きざま』をプロとしてどう現場で生かすことができるか，この国際化の時代に我々会員に問われることなのである。

さて，この会報『ＳＥＣＯ』は今年帰国された先生方と現在海外派遣されている先生方の貴重な体験を報告していただいた『現地の生の声』である。会員のみならず，県内の多くの先生方に少しでもこの会報の価値をご理解いただければ幸いである。さらに，この会員以外の多くの先生方にも，ご高覧いただけることを切に望んでいる。

最後に，平成１６年８月２６日には，第１５回関東ブロック全国海外子女・国際理解教育研究大会が，茨城県つくば市で開催される予定である。そのために，１０月には第２回実行委員会を開催して具体的な実施要項を決定した。今年度中に詳細な内容を決定して，会員各位に周知徹底を図るつもりである。平成１６年度の関東ブロック茨城大会では，新しい時代を先取りして実り多いものにするためにも，会員各位のご協力をお願いしたい。

本年度帰国された先生方からのお便り

マレーシアで印象に残ったこと

波崎町立波崎第三中学校長　　小出　治夫
（前コタキナバル日本人学校長）

今年3月までマレーシアのコタキナバル日本人学校に勤務していました。３年間の思い出は色々ありますが，中でも印象に残っているのが「言葉」のことです。

マレーシアは多民族国家ですが，そのせいか大抵の人々は最低３ヶ国語を話します。公用語のマレー語，各民族独自の言葉，それに共通語として一般的に使われている英語です。家庭や学校，職場，友人同士の語らい等でそれぞれの言葉を使い分けているのを見るにつけ，外国語の苦手な日本人としては，なんと器用な人たちだろうと感心することが度々でした。 今マレーシアは先進国の仲間入りを目指して「ルック　イースト政策」をとり，日本，韓国に追いつこうと努力しています。海外にいると日本人の技術力，知識，ノウハウの質の高さをしみじみと感じますが，外国語（特に英語）をもう少し使いこなせたら活躍の場も広がるし，世界に貢献できるのにと感じました。

マレーシアでも，政府が英語力向上には特に力を入れており，中学校からは主要教科の授業は英語で行われています。（小学校はマレー語）この政策が国民の英語力向上に大きく寄与しているように思いました。

日本でも文部科学省より「英語が使える日本人」のための行動計画が発表されました。また最近ある地域（特区）で小１から英語で各教科の授業を行う施策が着手されました。これからの日本人にとって英語を使いこなすことは必須です。本校でもALTが新しく派遣されたのを契機に特定の教科だけでもできないものか模索中です。

－学習発表会で活躍する日本人学校の子どもたち－

現地採用の先生方からつけてもらった私の通知表

取手第一中学校　　教諭　田村　雅人
（前サンディエゴ補習授業校　教頭）

「どうしてあなたみたいな若い人が派遣されたんでしょうね？文部省は何を考えているのかしら？ってみんなで話していたんですよ」。これは私の歓迎会で現地採用教員の一人がおっしゃった歓迎（？）の言葉です。

先生方の４分の３は私より年上でした。先生方に教頭として認めてもらうためには一生懸命仕事をするのはもちろん，補習校に通う子供たちのために自分から進んでいろいろなことに挑戦しようと思いました。

１　補習授業校での取り組み

①公開授業の実施　②研修会の見直し，新設　③先生方の意見をできるだけ取り入れた学校運営

④指導力不足の先生へのマンツーマン指導　など

２　検証について

３年間の総括として，先生方に私の通知表をつけていただきました。強制ではないことと無記名としましたが，２６名の先生が名前を書いて回答してくれました。

質問項目は３つ(教員数３７名中２７名回収)

①　現地採用教員の指導力向上に寄与したか？

②　学校運営に寄与したか？

③　その他気づいた点があったらお書きください。(自由記述)

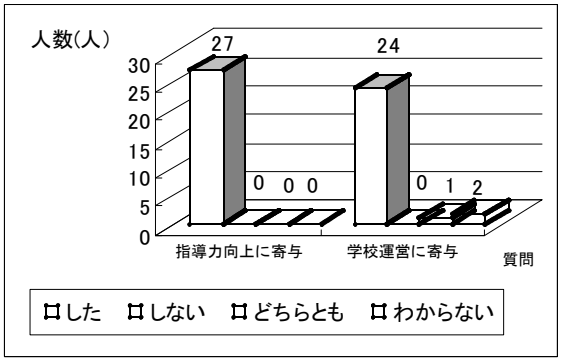


図1　田村の通知表(H15、3, 15)回答者数27名

《はじめの歓迎の言葉（？）を言った先生の質問３の回答の自由記述》

先生の真面目な人柄がいつも伝わってきた３年間でした。時には身体を壊しはしないかと皆，はらはらしていました。任務は十二分に果たされたと思いますが，アメリカ生活は楽しまれましたか？日本語補習校という枠内での仕事であっても，アメリカを知る，その国を身をもって知ることが，この国で生活している保護者，児童生徒を知ることになると思います。３年間で知ることは無理かもしれませんが，この広大な土地で何ものにもとらわれることのない自由な人々に触れ，感じることも多かったのでは，と思います。「ヨーロッパは建物，アメリカは人」と言われる程，この国の人々は他国にはない良さを持っていると私も感じています。みなのために捧げて下さった日々を誠にありがとうございました。一同心より御礼申し上げます。(中略)残りの日々を家族で楽しんでくださいね。

《指導力不足でマンツーマン指導した先生の質問３の回答の自由記述》

数学が好きで平成１４年度には，中学の数学を担当させていただきましたが，力不足で「証明」の単元が毎週が窮地でした。田村教頭先生には，教材の研究と指導内容に関して，毎週大変丁寧な指導をしていただきました。２学期からは毎週の授業案を田村先生に提出して，見ていただきましたが，私は教材の把握と授業案に時間がかかり，金曜日の夜遅くにやっと出来上がって，先生のご自宅にファックスで送って見ていただいたときが何回もありました。先生はそんな力不足の教師にも忍耐をもって接してくださり，先生の知識と助言を惜しみなく与えてくださいました。先生は，授業中の指導法に関しては，直すべき点はきちんとご注意くださり，自信を無くしていたときは支え励ましてくださいました。研究授業を数多く見せてくださり，生徒にとって学びやすく，興味を起こさせる授業の展開を実際に見せてくださったり，授業に使うための手作り教材も数多く作ってくださいました。

《専門外の中学３年の国語の公開授業を参観した先生の質問３の回答の自由記述》

無理を言って国語の授業をしていただき，ありがとうございました。大多数を占める「小学生&数

年で帰国予定」の生徒中心の学校運営の中で少数派の「中高＆長期滞在」の生徒たちと真剣に向き合う田村先生の姿は大変印象的でした。(中略)日本での御活躍をお祈りしています。３年間どうもありがとうございました。

３　最後に　　厳しくも楽しく充実した３年間だった。今後に生かし努力を続けたい。

在外教育施設に派遣されている先生方からのお便り

平成１３年度派遣

「クイーンズランド補習授業校創立十周年を迎えて」

クイーンズランド補習授業校校長　梶田　悦朗

クイーンズランド補習授業校は，それまで独自の歩みを進めてきたブリスベン補習校とゴールドコースト補習校が合併し平成６年４月から一つの学校としてスタートしました。そして今年で創立十周年を迎えることになりました。その記念事業として「十周年記念誌の発行」,「十周年記念ベースボールキャップの制作」,「十周年記念運動会の実施」を行います。

「十周年記念ベースボールキャップの制作」は，まずロゴのデザインを補習校児童生徒に公募，運営委員会で応募作品の中から優れたものを選定，業者に依頼しロゴデザイン入りのベースボールキャップを作成してもらいました。このロゴは小学４年生のデザインですが，補習校の頭文字であるJLSSQ(Japanese Language Supplementary School of Queensland)にオーストラリア国旗と日本国旗を融合させたすばらしい作品です。

キャップロゴマーク

できあがった記念キャップ

運動会の全体写真

障害物競走

表彰式

去る８月２３日，ゴールドコースト校の借用校であるオールセインツアングリカンスクールのグランドで「十周年記念第１０回運動会」を盛大に開催しました。現在の児童生徒数はブリスベン・ゴールドコースト両校合わせて２９７名が在籍してます。両校の児童生徒が一堂に会して活動するのはこの運動会の１日しかありません。ブリスベン校は「白組」ゴールドコースト校は「紅組」に分かれ，対抗戦が行われます。今年度は十周年記念行事でもあり，補習校卒業生にも呼びかけ多くの参加をいただきました。オーストラリアの学校には日本の運動会のような形態のスポーツイベントはなく，子どもたちの多くは補習校の運動会が初めての経験となります。補習校の目的の一つである「日本の学校文化を体験させる」に最も合致する行事で，子どもたちもこの日を楽しみにしています。

「十周年記念誌」については現在作成中です。ブリスベン総領事館の総領事を始めとして，ブリスベン・ゴールドコーストの日本人社会でご活躍されている方々からのご祝辞，補習校１０年の歩み，補習校の歴史を振り返る写真の掲載，児童生徒の作文，等で紙面を構成していきます。今年度末には完成の見込です。

ブラジルの日本語事情

リオ・デ・ジャネイロ日本人学校　教諭　本橋　和久

最初の日本人移民がサントス港に着いてから，今年で９５年になります。日本にいるとまず実感できませんが，こちらに住んでみると実にたくさんの日系の人たちがいることがわかります。ポルトガル語が公用語であるブラジルでは，日本人学校での勤務はもちろん，仕事の基盤となる日常の生活も，日系の方々の支援なくしては成り立ちません。２年前の赴任時には，日本語とポルトガル語を何の不自由もなく使いこなす彼らがいてくれたことで，私たちの不安がずいぶん軽減されたことを思い出します。

そのような言語環境の中で，リオ・デ・ジャネイロ日本人学校では日本語を発信する交流活動を行っています。今年度の修学旅行では，南米最大の日系社会を擁するサンパウロ州で，日本語普及センターの子どもたちとホームステイによる交流を行いました。また，日本語を学ぶ日系及び非日系の子どもたちに日本語を学んでもらうためのグループエンカウンターも用意し，日本人学校の子どもたちが日本語の先生役になって交流活動をしました。

毎年２回ずつ行っているリオ・デ・ジャネイロ連邦大学日本語学科の学生との交流でも，日本語や日本文化に興味を持って熱心に学んでいる学生さん達に対して，子どもたちが書道や日本語の先生役になります。今年は真っ白なＴシャツに好きな漢字を書く活動や，聖徳太子ゲームなどの言葉遊びを企画し，大変充実した時間を過ごすことができました。

いずれの活動でも，相手は日本語の学習者ですから，言葉をはっきりと，そしてゆっくり話さないとわかってもらえませんので，子どもたちは何度も何度も練習して本番に臨み

ます。ある時には，訪問先の日系二世の方に，「最近の日本語は速すぎますね」と言われ，教えるつもりが反対に話し方を教えられたこともありました。
　このような活動は，日本人学校の子どもたちが「日本語」の大切さを再認識するだけでなく，ブラジルにも日本語を一生懸命勉強している人たちがいることを肌で感じられる貴重な機会になっています。
　日本語を使った活動でブラジルを知る，そして日本を知る。これが，私たちのリオ・デ・ジャネイロ日本人学校の特色のひとつです。

テヘラン邦人脱出

テヘラン日本人学校　教諭　小林信行

　１９８５年3月１８日イラクが「イラン上空を航行する航空機をいづれの国であろうとも撃墜する。」と発表しました。当時のイラク大統領は，あのサダム・フセインです。そして，その期限は今から４０時間後の３月２０日午前２時とされました。
　テヘラン在住の日本人は脱出路探しに必死になります。そして，３月１９日の日本の夕刊に「テヘラン邦人３００人以上待機」の見出しがでます。それは，日本人は航空券を購入していたのにもかかわらず，ヨーロッパの各航空会社は自国民優先のため，日本人を乗せてくれなかったためです。
　この時，自衛隊機が救援に向かったでしょうか？答えはノーです。憲法上も無理だし，軍用機ではなおさら攻撃をされる危険があったからです。そこで，外務省は，日本航空に救援を依頼しました。しかし，日本航空は，危険なので断りました。絶対絶命の日本人，空港は炊き出しのおにぎりを食べ，疲労しきった人々であふれていたといいます。
　明けて，３月２０日の日本の朝刊に「テヘラン邦人　希望者ほぼ全員出国」の文字が躍ります。いったい誰が，日本人を助けてくれたのでしょうか？
　この絶望的な状況でトルコ航空が日本人救出のため危険をかえりみず，テヘランに乗り入れました。タイムリミットのわずか１時間１５分前でした。
　どうして，トルコ政府は危険を冒してまで日本人のために飛行機を飛ばしてくれたのでしょうか？　・・・本当の理由は，日本政府もマスコミもわかりませんでした。
　そのヒントが，元駐日トルコ大使ネジャッティ・ウトカン氏の言葉の中にあります。「エルトゥール号の事件に際して，日本人がなしてくださった献身的な救助活動を今もトルコの人たちは忘れていません。私も小学校の頃，歴史の教科書で学びました。トルコでは子ども達でさえ，エルトゥール号のことを知っています。今の日本人が知らないだけです。それで，テヘランで困っている日本人を助けようとトルコ航空機が飛んだのです。」

世界遺産－イスファハン－光のの差し込むモスク内部

世界遺産－ペルセポリス－２５００年前の宮殿跡

　「エルトゥール号の事件」とは，いったい何なのでしょうか？紙面の関係で，これは，みなさんへの宿題とします。調べてみれば，そこに明治の慈悲深い，誇り高き日本人の姿を発見するでしょう。

『小学部から中学部へ』

デュッセルドルフ日本人学校　教諭　　志村　克己

早いものでドイツ生活３年目を迎えました。これまでの２年間は小学部の３学年，５学年と勤めてきましたが，今年は中学部に移りました。もともと中学（理科）だったのでそれほどの戸惑いはありませんでしたが，担当教科がなんと３科目（免許外で数学と技術も）になり，教材研究が大変な日々をおくっています。

３年担任ということで，春にはベルリン・ドレスデン方面へ修学旅行に行きました。海外での修学旅行は日本のそれとは全く違います。何をするにもドイツ語との戦いでした。交通機関や宿泊施設，美術館や博物館等では，お互いに目的がわかっているので日常会話程度の語彙力だけで十分でした。しかし，ドレスデンの現地校との交流（昨夏のエルベ河畔水害に対して本校生徒会が募金活動をし，寄付をしたところから交流が始まったのです）を企てたので，相手校の先生や生徒達とコミュニケーションをとるには時間がかかりました。内容的には，日独混合のグループをつくり，ドレスデンの旧市街を半日市内観光するというものです。会話の手段は独語の他に英語も使っていいことにしました。しかしドイツ人（特に旧東ドイツ）は，日本人と同じくらい英語が話せないのです。それでも両者，和英と独英の辞書を片手に，身振り手振りも交えてなんとかお互いの気持ちを伝え合いました。初めはギクシャクしていた生徒達も次第にうち解けて，一緒に写真を撮ったり，メールアドレスを交換したりできるようになっていました。中には戦争で壊れた教会を案内してもらったり，美術館を見学をして絵について説明してもらったりするグループもありました。

ベルリンでは班別自由行動にしました。生徒の多くがブランデンブルク門や壁博物館，チャックポイントチャーリーなど，壁に分断され東西に分かれていた頃のベルリンに興味を持ち，見学していました。このときの印象が非常に強かったらしく，過日行われた「学校祭」では，３学年全員で生徒オリジナルシナリオの劇「die Mauer(壁)」を演じました。壁によって分断され，兄は壁の警備兵になり，弟は自由を求めて亡命者の道を歩むという，兄弟愛と悲劇を描いた物語です。開演前から長蛇の列ができ，体育館は超満員になりました。観客の多くは保護者でしたが，近所のドイツ人も多く，大勢の方々が感動の涙を流していました。

現在は，数々の大きな学校行事も一段落し，３年生はこれから三者面談をし，大切な進路決定の時期に入ります。生徒達の進路は，現地ギムナジウムやインターナショナルスクールへの編入，在欧の日本系高校への進学，単身帰国し日本の高校への進学等様々です。また日本国内の公立高校だけをとってみても都道府県によって対応が違うことなど，手続き上，かなり複雑な面が多々あります。今の私は，こういった海外ならではの進路指導，進路事務に関する勉強中です。　生徒達が卒業すると同時に，私のドイツでの勤務も卒業となるでしょう。ここで培った国際性を帰国したらぜひ役立てていきたいと思っています。

ＳＡＲＳ騒動

台中日本人学校　教諭　北見　裕

台中日本人学校に派遣３年目になる北見裕です。今年度の台中日本人学校（台湾）は，ＳＡＲＳ騒動で幕を開けました。ＳＡＲＳが学校に及ぼした影響や学校側が取った対策等について報告させていただきます。

ＳＡＲＳ（重症急性呼吸器症候群）がアジアを中心に猛威を振るったこの春，台湾の台中日本人学校にもその影響が大きく響いてきました。３月末に香港・シンガポールを中心にＳＡＲＳ感染者が急増しＷＨＯは台湾をＳＡＲＳの伝搬確認地域に認定し，その後渡航延期勧告を発出した。それを受けて，文部科学省からはＳＡＲＳへの対策を至急に取るよう通達が来た。もちろん，ＳＡＲＳの対策を取っているのは日本政府だけではない。台湾政府（教育部＝文部科学省にあたる部署）も，“全国民１日２回の体温測定を義務づけ”“外出時のマスク着用”“疑似感染者（高温発熱者）の隔離（10～14日間の自宅隔離）”など，具体的な対策を打ち出してきた。

それらを受け，台中日本人学校では行事面で次の三つの対策を取った。

①始業式・入学式の１週間延期（ＳＡＲＳの状況を判断するため）

②運動会（５月１７日予定）の延期と児童・生徒のみでの実施（部外者の進入禁止）

③日本（関西方面）への修学旅行（６月3～6日予定）の延期（生徒への対応を考慮）

その他にも，水泳学習の制限（１日１クラスの実施，消毒槽の設置），学校開放の中止（部外者の進入禁止），健康診断の延期（台湾の病院関係者の来校を考慮），英検の中止（英検協会の判断で），宿泊学習の規模縮小（校外の宿泊施設を利用せずに，学校に宿泊して実施）など，日常の教育活動すら制限しなければならなかった。

また，日常的な対策として，次の五つの対策を取った。

①個人の健康観察カードを作成して，毎日の健康観察を徹底

②登下校時（スクールバス内も含む）のマスク着用（外出時も含む）

③朝・昼・体育後のうがいの励行（各教室・保健室前にうがい薬と紙コップを常備）

④教室内のアルコール消毒（スプレー式の消毒液を各教室に常備，自由に使用可）

⑤家庭での体温測定，登校時の体温測定の実施（各クラスに耳式体温計を用意）

その他にも，中国医薬学院附属病院の主任医師を招いての職員研修「ＳＡＲＳの予防と対策について」を実施，ＳＡＲＳ対策マニュアルの作成，スクールバスの定期的な消毒（毎晩）などの対策もとっている。

このような対策を取りながらも，日々ＳＡＲＳの見えない恐怖に脅かされる毎日であった。病原菌は何なのか？感染経路は？治療法は？数多くの謎に包まれたＳＡＲＳ。報道では，死者が何人で，感染者が何人･･･そんな報道しか流れない。街中の人がマスクを着用し，至る所で消毒と体温測定が実施されている。大手デパートやスーパーに買い物に行っても，入り口で全員が体温を測られ測定済みのシールを貼られる。（それらのシールをコレクションしている者まで現れた･･･）そして，台湾の日系企業の中には，派遣職員の家族を日本に一時帰国させる企業が出てきた。台中日本人学校でも，１４人の児童生徒が一時帰国をした。このような状況の中，何が一番私たちを不安にさせたかというと，大げさに取り上げすぎる報道や誤った知識の報道，また，我関せずといった態度をとるごく少数の民衆達であった。そして感じたことは，『自分の身は自分で守る！』である。ＳＡＲＳには，徹底した自己防衛しかないのである。子どもたちにもこのことは，徹底して話をした。

このような話をすると，いつもＳＡＲＳに怯えて生活をしていたように捉えられるかもしれないが，実際にはそうでもない。学校では，毎日明るく登校してくる子どもたちに力をもらった。「学校は一番安全な場所だもんね。」と言って元気よく活動していた。さらに，マスクやうがいのおかげで，私のクラスは１学期に欠席した者が一人もいなかった。（風邪すらひかなかった･･･）日本や台湾の多くの人たちにも勇気づけられた。体温計や

マスクを送ってくれた人たちの温かい心に感謝している。「必要な物があったら何でも言って下さい。」そんな言葉にどれほど勇気づけられたか･･･。

台中日本人学校は，１９９９年９月２１日の台湾大震災での校舎崩壊，そして２００３年春からのＳＡＲＳ騒動,いつも世界中の人々からの温かい支援によって励まされている。それらの支援に感謝の気持ちを忘れることなく教育活動に専念していきたいと感じている。そして，ＳＡＲＳ騒動がこのまま終わって欲しいと強く願っている。ＷＨＯによれば秋から冬にかけてＳＡＲＳが再発する可能性が高いと言う。しかし，願わくば，このまま

静かに収束して欲しいものである。だが，もしＳＡＲＳが再発したとしても，対策は同じである。『自分の身は自分で守る！』徹底した自己防衛を今後も繰り返すしかないのである。台中日本人学校の明るく元気な子どもたちと共に，ＳＡＲＳに負けることなくいろいろなことに挑戦していこうと考えている。

サーカス一座の如く

ロンドン補習授業校　　大塚　敬昌

「補習校へ赴任なんだって，それってどんな学校なんだ？」
これは，赴任直前に，はなむけの言葉と共に同僚からかけられた言葉だ。
「先生方はイイですねぇ，土曜日１回だけの授業で。平日はお休みなんですか？」
「イヤ，土曜日の授業日に向けての準備をしているんですよ。」
「ハァー。ところで，先生は何年生の担任なんですか？」
「イヤ，私は補習校勤務ですから…」
「担任はもたれてないんですか。では，日本人学校（全日制）では，何年生の担任なんですか？」
赴任当初，同じ屋根の下で働く「全日制」（ロンドン日本人学校）に派遣になった同年次の仲間からこのような質問をよく受けた。「いやはや,『補習授業校』とは，これほど認知度の低い学校なのか」と，愕然としたことを思い出す。

ロンドン補習授業校は，経営母体である「有限会社日本人学校」のもとに，ロンドン日本人学校と併設されている私立学校である。授業は週１回のみ。教科も国語のみである。児童生徒数は約１２００名。世界でも屈指の大規模補習校である。派遣教員は校長含め４名。私が担当しているのは，在籍数７００名，小・中学部の他に高等部と日本語科（日本語を第２母国語とする日本語学習コース）をもつ「アクトン校舎」という学校だ。

我々の派遣目的は，学校（校舎）運営および現地採用講師への教科指導支援。要するに，週１回の授業日を如何に充実させ，効果を上げるか，というところにある。以前の派遣教員が「我々の仕事はサーカスの興行師と同じだ」と喩えた。週１回の講演を成功させるために綿密な準備を施し，子ども達に喜びと感動を与えるために「授業」という出し物を提供する。しかし，授業をするのは，曲芸が得意な講師や，獣使いが上手い講師や，巧妙なジャグリングを得意とする講師で，自分ではない。
そして，その日１日が終わるとすぐにテントをたたみ，次の講演の準備に入る…

こちらに赴任して２年半。月日が経つのは早いものである。多忙ではあるが，この仕事が好きになった。補習校が好きになった。多少の波は確かにあるが，校舎運営も講師との人間関係も順調だ。しかし，任期は残り僅か。どうやら，我がサーカス一座も終幕が近づいているらしい。「やり残しがないように全力を尽くそう」と思う，今日この頃である。

平成１４年度派遣

海峡に夕風吹けば

台北日本人学校　教諭　　小倉　祐一

「海峡に夕風吹けば」とは小林亜星氏作曲の台北日本人学校の校歌の一節です。台湾（フォルモサ）の夏は，南国のぎらつく太陽の輝きとともに熱風のような風が吹きます。体温以上の気温の中，大王椰子の葉さえ項垂れてお辞儀をしているように見えます。日が傾き，海峡に夕闇が迫る頃，やっと風も風らしく涼しげになります。この台湾にある台北日本人学校は，歴史も古く今年で創立５６周年を迎えます。学校の所在地は，台北中心から１０㎞ほど北の天母地区。日本人学校の前にはアメリカンスクールがあり，周辺は国際色豊かなところです。

現在の生徒数は，9月1日現在で小学部・中学部合わせて810名。本校は学校とはいえ，時として日本の顔の1つとして見られるため，日台両国の著名人の訪問も度々あります。今年の3月1日には，李登輝前総統が来校し講演会を開催しましたが，逆に，日本政府への抗議のデモ隊が校門前に集まるといったことも起きます。SARSの問題では，日本のニュースにも登場しましたが，現地校へのマスクの贈呈式などでは地元のマスコミにも大きく扱われました。

また，学校の大きな特色として，国際結婚家庭の割合が高いことがあげられます。その数は全体のおよそ30％から40％にものぼっています。父親が日本人，母親が台湾人という家庭が比較的多く，ちなみに，国際結婚をした両親をもつ俳優の金城武さんも卒業生の一人です。 本校では全学年で週1回の中国語学習を実施していますが，テキストは学校独自のもので，手作りの現地理解の授業が行われています。その反面，国際結婚家庭の比率が高いため，児童生徒の日本語力，進路の保証が大きな教育課題となっています。

茨城県の教育目標のひとつに「郷土を愛し，協力しあう心を育てる」とあります。高久清吉氏は「身近な生活領域の中での体験の貧弱化という現実」は大局的に見れば「人間の人間としてのまともな成長発達を決定的に阻害する」と，その著書『哲学のある教育実践』で述べられていますが，「身近な生活領域」「地域」の機能が希薄な海外校で「郷土を愛する心」をどう育てるのかも課題になっています。

写真は，昨年度，小学部２年生の生活科の授業で「地域との触れ合い」を目指し実施し

た『天母探検』の様子です。今年度は，私は中学部の国語を全クラス担当していますが，国語（日本語）の教育を通して，郷土を愛する生徒を育てたいと考えています。

台湾銀行を訪ねて

お茶屋さんを訪ねて

雑感；　魅力ある学校づくりを目指し

～Mixta　No.2000（Zacogito　chinantoraグァテマラの公立小学校）を見て～

グァテマラ日本人学校　教諭　立石　祐之

日本の教育は，システム的な観点から，そのカリキュラムある系統性と整合性にすばらしいものがある。しかし，言葉的に見れば，環太平洋にある小さな島国で使われている日本語は，あくまでローカル語でしかない。最近では，一部の学校で，「イマージョンプログラム」という教育プログラムが開発されているように，真の国際感覚とコミュニケーション力の育成が必要と認識されているが，決して十分とはいえないだろう。確かに，その日本語を通して，世界の様々な知識理解は得ることは可能なのかもしれない。しかし，世界共通語である英語を媒介として，知識を身につけたり，思考力を深めていこうとするこの発展途上国にある現地校やアメリカンスクールには，学ぶ姿勢というか，生きてはたらく本質的な教育の在り方について学ぶべき点がある。日本を振り返れば，子どもたちは，豊かさの中に溺れ，なにか目標を失いつつ，だらだらと勉強してはいないだろうか。勉強を勉強だからと言う理由だけで勉強してはいないだろうか。今後，国際化が進む現在の社会の中で，学校は世界の中で取り残されぬよう，真のコミュニケーション力を発揮できる子どもたちを育てていくことが求められてこよう。未来に生きる真の国際感覚を子どもたちに身につけさせていくことが教育の責務と感じる。今，世界の共通語である英語や複数の国で実際に使われているスペイン語等，複数の言語能力を身につけさせていくことはあたりまえのように世界中の教育は進んでいるような気がする。

Mixta　No.2000（Zacogito　chinantoraグァテマラの公立小学校）の校長César　Oswaldo　León　Flores さん（２８才）の学校は，学校が好きでたまらない子どもたちでいっぱいだった。César 校長は学校経営で心がけていることとして，「①子どもたちを呼んでくる。②世話をする。③卒業させる」の３つが大切であると，そばに寄ってくる子どもたちを抱

きしめたりしながら話していた。実際に，2000年に205人だった児童数も2002年には400人と増えていた。「①呼んでくる」に対しては，保護者に将来のために学習の必要性を伝え（社会見学を行い，仕事は家の仕事だけでないことなど），また，子どもたちに貧しさを克服するため，生活をよくするために「学校で学び，卒業させていくこと」の重要さを地域コミュニティまで理解を求め，その協力体制をしっかりと取り，地域に根ざした学校作りを実践している。校長を始め，先生方の熱意が十分感じられた。「②世話をする」とは，家庭訪問をしたり，学費の寄付をコミュニティから探してあげたり，先生方の給料からも卒業後の子どもの学費を寄付し援助しているなど，親身になって子どもや保護者に接している。また，教師が学習内容を探し，子どもたちに教材をコピーし，授業を行っている。子どもたちは将来の夢を持ち，元気がよい。「学校が好き」，「将来××になりたい」とほとんどの子が自分の思っていることを自由に発言する。「③卒業させる」ということであるが，中学への進学も公立校（S県では県内に公立校は２校しかないという）は学校数が少なく，組合の建てた学校や私立校への進学がほとんどである。ここの小学校の卒業生は毎年，23～25人いるが，半数は中学進学できず，労働者となって働いているのが現実である。そこで，今，この小学校では，中学卒業資格習得のための通信教育プログラムを導入しようとしている。これは，テレセコンダリア（メキシコのテレビビデオ教育プログラム）と呼ばれる通信教育システムでビデオを見ながら中学卒業の単位数を得ることのできるプログラムで，政府で認可されているそうである。

この小学校にも多くの課題がある。１つは，留年の問題である。留年は学年末テストで判断される。仕事をさせていて勉強が足りない児童や特殊学級がないため，一律に学習の達成度が低い児童については留年が決まってしまう。２つめは，より良い環境作りのための資金の問題である。常に，コミュニティーや政府の援助を呼びかけている。コンピュータ室も見せて頂いたが，日本では今はもう使われていないOSを大事に使っている。希望者にレンタル料を出してもらい課外授業として使っているそうだが，家の手伝いの他にもコンピュータを使った職業もあることを知ってもらう程度と校長は話していた。そして，日本の学校へコンピュータを視察している校長なので，「いらなくなったコンピュータがあればどうぞもらい受けます。」と笑いながら話していた。

多くの課題を抱えながらも，夢を持ち学校経営をしている２８才の校長が１年生のクラスで英語の歌を歌い始めると，続いてクラス全員が歌い出し，校長が突然，目の前の子どもに「What's colar is this？」と聞いた時，その子どもはすぐさま「red」とスペイン語ではなく英語で答えていた。元気のいい，将来の夢を持ったこの子どもたちの未来が楽しみな気がした。

ボンベイ日本人学校　教諭　　齊藤貴司

私たちが住むムンバイは比較的治安がいいと言われていて，今までは子ども連れでも町中を歩くことができました。ところが，８月に市内２カ所で爆弾テロが起きました。その

内１カ所は私たち日本人も良く行く場所だったのですが，幸い私たちの周りでは被害に遭った人はいませんでした。しかし，多くのインド人が被害に遭ってしまいました。新聞や雑誌,テレビのニュースなどで現場の様子を知ることができましたがとても悲惨なもので,犠牲者の中にはいまだに身元がわからなかったり，田舎から初めてムンバイに出てきてたまたま被害に遭ってしまった親子がいたり，自分の子どもの音信が不通になっていて，かなり後になって新聞を見た知人から教えられて自分の子どもの死を知ったという話もありました。この事件の後はさすがに心配になり，楽しみにしていたムンバイ最大の祭である１０ｔｈガネーシャを見に行くことも自粛するようにということになりました。しかし，インドの人々にとって１０ｔｈガネーシャはなくてはならないもので，毎晩夜中まで爆竹をならし，スピーカーから大音量で音楽を流し，派手に踊りながら練り歩いていました。特に爆竹は物凄く，まるで爆弾が破裂したような音がします。それを時間も場所も構わずに破裂させます。「爆弾騒ぎがあったんだから今年はさすがにやらないだろうな」と思っていたら，去年以上に凄かったです。無邪気に爆竹に火を付け，夜中までにぎやかに踊っている人たちを見ると「さすがはインド！」と改めて思いました。

ところで，先日ボンベイ日本人学校を会場に「グルモハル交流」という行事が行われました。簡単にいうと夏祭りみたいなものです。ふだんから交流しているインドの現地校２校と，アメリカ，ドイツ，フランスなどのインターナショナルスクールの児童生徒，印日協会の方々を招待し，日本人学校の子供たちが考えた出店でゲームを楽しんでもらい，一緒によさこいソーランを踊りました。短い期間で準備をしたのでたいへんでしたが子供たちはよく頑張りました。当日も暑い中，一生懸命英語を使ってコミュニケーションを取っていました。本校は少人数なので一人ひとりの役割が大きく一つの行事をするのはたいへんですが，今回の行事を通してまた少し子供たちが大きくなったような気がしました。

出店（ヨーヨー釣り）

現地校の児童にヨーヨー釣りのやり方を教える日本人学校の児童

よさこいソーラン

よさこいソーランを披露する日本人学校の児童生徒

シンガポールの人々の信仰心について

シンガポール日本人学校小学部チャンギ校　教諭　沼田　義博

シンガポールに赴任して以来十数ヶ月になる。その間，様々な街に赴き異国情緒を味わう機会に恵まれた。その街の中では，実に多様な人種の人々がエネルギッシュに，あるいは真摯に物事に向かい合っている光景を目にすることができた。深みのある文化と生活観を感じさせる国である。

８月に入るとチャイナタウンを中心に各仏教寺院の近くには色とりどりの祭壇やら舞台が立ち並ぶ。祭壇には山盛りの食料品が並び，舞台では夜な夜なチャイニーズオペラが演じられる。ハングリーゴーストのお祭りである。日本で言うお盆（施餓鬼供養）にあたる恒例行事だ。この時期には死者の国の門が開き，善い霊・悪い霊の区別無く一斉に街中にあふれ出すという。その霊を慰め，鎮めるために食料を積み上げ，踊りを舞うのだそうである。そこでも当然祈りはつきもので，夕方になると祭壇や舞台の前で神銭を焚き，線香を手向ける人々の姿が見られるようになる。実に２週間にわたる祈りと宴の日々である。

シンガポールでは，太平洋戦争中多くの尊い生命が犠牲になったことは周知の事実である。しかし，それが直接この国の人々の信仰心の高いことにつながるかどうかはわからない。ただ，多くの犠牲者の方々の無念に想いをはせるとき，街角の寺院で一心に祈りをささげている人々の背中に一人の日本人として，それらの歴史的な背景を感じずにはいられないことは事実である。東南アジアの奇跡とまで言われ，繁栄を極めたこの国で，若者たちがそれぞれの神や祖先に対して祈りをささげている姿には，一種の感動すら覚える。

今日も街角の寺々では，人々の敬虔な祈りの声が浪々と響いている。

バンコク日本人学校　教諭　竹中　弘通

平成１４年度在外教育施設派遣教員として，バンコク日本人学校に勤務しております。派遣から今日まで，多くの先生方にご指導いただき，無事職務を遂行することができ，毎日子どもたちと楽しく過ごしております。

タイ，バンコクは，年間の平均気温が３０?，昨年の派遣時には３８?を越える猛暑で，日中屋外にでるだけで体力を消耗してしまいます。教室には冷房が完備されているので，学習活動には問題ありませんが,外気温との差があるので体調を管理するのが一苦労です。

バンコク日本人学校は，バンコク都の中心部から北東へ約１０キロメートル程の所にあります。設置機関は「泰日協会」で，タイ国私立学校（日本国文部科学省海外教育施設認定校）として公認されています。全校児童・生徒数は約２，０００人。教職員数は１２０人で，小・中併設校では，世界最大規模の日本人学校となります。

本校の特徴として，在外教育施設ならでわの取り組みを行っています。まず，タイ語の学習が全学年週１時間設けてあります。タイの生活で日常的にタイ語を使うことは，その国の文化に触れる手がかりとなります。子どもたちは，学習したタイ語を生かし，現地校との交流学習会では，積極的にタイ語を使ってコミュニケーションを図っています。私自身も着任後，約７ヶ月間タイ語を学習し，買い物や食事の注文など，困らない程度にタイ語を話すことができるようになりました。

また，片言のタイ語でも一生懸命相手に伝えようとすると，ほとんどの人が理解を示してくれます。こちら側の姿勢でタイの人々とも自然に打ち解けていけると実感しました。

また，本校にはITルームがあり，パソコンを使っての情報教育にも力を入れています。パソコンの起動から，メールの作成方法，インターネットの利用の仕方，ホームページの作成等を学習しています。海外では，日本の書籍はたいへん高価で，容易に手に入らないのが現状です。図書室の本にも限りがあるので，調べ学習ではパソコンが活用されています。

さて，私が担当している障害児学級（なかよし学級）を紹介したいと思います。現在，この学級に通級している児童生徒数は４人です。在籍児童を含めると６人の子どもたちが元気に楽しく学習をしています。在外教育施設で障害児学級が設置されている学校は珍し

く，世界でも数少ない学級の１つです。通級指導の子どもたちは，主に国語と算数を学習しています。国語では，一日の生活に見通しが持てるように日課表を記入したり，昨日の出来事を振り返り，事柄の順序を考えながら発表したりしています。また，物語を読んで感想を文章にしてまとめる学習も行っています。算数では，身近にある物を利用して数の学習を行ったり，計算の問題に取り組んだりしています。

この他に，自閉症児への日常生活指導や遊び，体育，音楽，自立活動などの学習も行っています。

どの子どもたちも学びたいといった意欲がたくさんあり，毎時間を楽しみにしています。

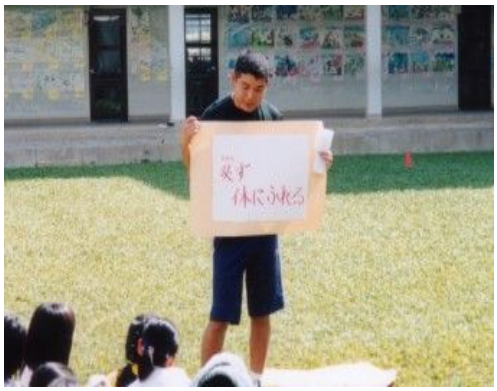
昨年度，４年生の国語の単元「耳と心で読む」の学習では，担任の先生方とチームティーチングで，手話や口話，目隠し歩行（ブラインドウォーク）の体験学習を行いました。ほとんどの子どもたちが経験したことのない学習でしたが，口話で伝言ゲームをしたり，手話で歌を歌ったり，恐る恐る歩いた目隠し歩行の活動を通して，障害者の立場にたった貴重な体験ができたのではないかと思います。

放課後は，日本の部活動と同じようなサークル活動があります。この活動は，日本人会が運営しており，教職員も参加しています。私は，バレーボールサークルを担当し，子どもたちと汗を流しております。毎年，タイ文部省大会（全国大会）に出場しています。

また，私事ですが，ボランティア活動として，トンブリー地区の自閉症施設やクロントーイ地区のスラム街の一角にある児童図書館へ行き，子どもたちと遊んだり，絵本を読んだりして楽しく過ごしております。

このように在外教育施設で充実した教育活動を展開できるのも，海外子女教育国際理解教育研究会の先生方や在籍校（県立美浦養護学校）の先生方のご指導おかげだと感謝いたしております。

これからも，タイの地でたくさんのことを学びながら，子どもたちのために精一杯努力してまいりたいと思います。



平成１５年度派遣

「インドネシアの文化に触れて」

スラバヤ日本人学校　教諭　渡辺幸司

今年度，在外派遣の機会を頂きインドネシアのスラバヤ日本人学校に赴任しました。全校児童生徒数は，６３名（小中学生）と大変少ない学校です。現在，小学部６年生５名の担任として日々努力している毎日です。また，教科が体育ということもあり，全学年を教えることになり，小学校１年生から中学校３年生まで義務教育９年間を見通した体育の授業の在り方についても研究しているところです。子ども達の様子を見ると，中学生が小学

１年生と遊んだり，協力し合って生活するなど，心優しい素直な子ども達が多い学校です。

町の中に出てみると，モスクと呼ばれるイスラム教の建物が多く見られ，朝４時３０分から１日４回お祈りがあります。その時間になると町中に音楽が流れ，お祈りの時間であることを知らせます。イスラム教の信仰が深い国ということがよく分かります。

学校では，総合的な学習の時間を「スラバヤタイム」とし，国際理解を目指した取り組みとして，インドネシアの文化を取り上げたテーマや現地校との交流を行っています。主なテーマは，「イスラム教」「ものつくり」「セパタクロー」「バドミントン」「インドネシア料理」「インドネシアの生き物」「ガムラン音楽」「米作り」です。それぞれテーマに向かってグループごとに計画を立て，現地講師による技術指導や校外学習，現地校との共同作業など，体験学習を多く取り入れながら国際理解を深めていきます。私は，現在「ものつくり」を担当しています。前半は，インドネシア伝統のジャヌールを後半はバティクつくりを体験します。ジャヌールは，結婚式などのお祝いに家の前に飾る物です。ヤシの葉っぱを上手にナイフで切り，バナナの木に付けていきます。高さ４～５ｍくらいの大きな飾りとなります。

まだまだ慣れないことが多いですが，毎日がいろいろな発見でとても新鮮な気持ちで充実した日々を送っています。今回頂いたチャンスを無駄にしないよう，今後も今の気持ちを忘れずがんばりたいと思います。そして，インドネシアの国がもっと好きになれるように，いろいろな体験を通して文化を理解していきたいと思っています。

シンガポール日本人学校中学部　教諭　児矢野康之

１　はじめに

赴任してから早５ヶ月が過ぎようとしてしています。赴任当初は，イラク戦争が終結に向かう頃で世界情勢が不安定であり，またＳＡＲＳの影響もあり，２歳の幼い息子と妻のは心配することが多かったように思われます。実際，外出はほとんどしませんでした。しかし，次第に生活にも慣れ，シンガポールの生活を楽しむゆとりがでてきました。さて，これまでの学校生活を振り返って生徒たちの印象を述べます。

２　暑い国でさらに燃える生徒たち

ワイシャツにネクタイがあればほとんどの会合で失礼にならないシンガポールですが，入学式では上着を着用します。しかも，エアコンも扇風機もない体育館では，生徒，職員，保護者も汗だくです。生徒との出会いは暑さの洗礼を受けた入学式でした。しかし，暑い中ですが，生徒は整然としており，感心しました。

一年の中で一番暑いといわれる６月に体育祭を実施しました。皮膚の弱い生徒は軽い火傷の症状もでてしまいます。競技以外は各学級のテントで応援です。広いとはいえない本校グラウンドの実施ですが，狭いなりに考えられた種目で競技を競いました。アナウンスは，生徒により日本語と英語の両方です。保護者の中には，日本語を理解できない親がいるからです。また，マスゲームや創作ダンスは日本のものの中に異文化を取り入れ我が校オリジナルのものを発表しました。

文化祭は，９月に行われます。転出入の多い時期ですが，転入生もすんなりと溶け込みます。実行委員会は生徒主体で行われ，文化祭の一週間前から昼休みの時間にバンドやコント，選択教科の発表をするという文化祭ウイークを設けました。主体的に前向きに取り組む生徒が多く自分達の手で築こうという意識が強いです。

３　おわりに

日本を離れてはじめて実感する良さ，他国での生活ではじめて経験すること。まだまだこれからの生活に何が起こるかわかりませんが，思う存分シンガポールでの生活を味わいたいです。

「多民族国家シンガポール」

シンガポール日本人学校チャンギ校　教諭　佐々木　優子

古くから貿易が盛んだったシンガポールは，商人や労働者など数多くの移住者により栄えてきた多民族国家です。そのため信仰する宗教も様々で，生活様式や習慣も異なります。
また，その違いは，街のいたる所で見られます。

今回は，今まで私が体験した「民族に関するお祭り」「寺院」「生活様式や習慣」などについて報告したいと思います。

シンガポールの仏教は，道教や儒教の教えが入り混じったものだそうです。寺院は大変鮮やかな色使いで豪華な造りです。虎や獅子が祭ってある事が多く，なぜかみかんをくわえているものもありました。おみくじがあり私もやってみることにしたのですが，その方法は，２つの木片を投げ，それが表と裏にわかれたらおみくじをひけます。木の棒の先に数字が書いてあり，その番号と同じ札を取ります。お祭りでは，ベサック・デイ（仏陀が涅槃に入る事を祝う祭り）と中秋節を体験しました。中秋節は中秋の名月を祝うお祭りで，ムーンケーキ・フェスティバルと呼ばれます。その名の通りさまざまな種類の「月餅」が用意され，それを食べながらお祝いをします。日本でいうと「お団子」でしょうか。また，ランタンを持って街を歩きます。写真は，ローカル校の「ランタンフェスティバル」に招待された時にふるまわれた様々な“月餅”です。夕食が月餅とチャイニーズティーのみだということが不思議ではありましたが，食べてみるとお菓子というよりはおかずといった感じです。ひとつ１０００ kcal 以上あると聞き，気をつけながら少しずつ食べましたが・・。また，マレー系の人たちを配慮し，豚の油等を使わないものも用意されていました。チャイニーズガーデンでは，約１ヶ月間イベントが開催されていました。今年のメインキャラクターは“キティーちゃん”で，日本語の音楽が流れていたのも不思議でした。

インド系の人が信仰している「ヒンドゥー教」の寺院には多くの神像を彫り込んだカラフルな塔門があります。牛が神の使いの聖なる動物とされているため，たくさんの牛が祭られています。もちろん，牛肉は食べません。リトルインディアには多くの寺院があり，日曜日に訪れると，街中男性ばかりで女性の姿はありません。

マレー系の人が信仰している「イスラム教」では，１日５回，メッカの方角に向かってお祈りをします。学校でもマレー系の人がいて，よくお祈りをしています。ホテルには部屋の隅にメッカの方角を示す印がありました。モスクを訪れる時は，肌を出さない服装で行きます。

その他，グットフライデー（キリスト教の聖なる金曜日）は祝日として学校も休みになるなど，日本とは違った祝日があり，異文化を実感しました。１０月上旬には，道教のお祭りである「九皇帝祭（エンペラーゴットフェスティバル）」に参加する予定です。

アルゼンチンのごみ事情

ブエノスアイレス日本人学校　教諭 今瀬　智洋

「なぜ，アルゼンチンではごみを分別しないのですか？」

「アルゼンチンは日本と違って広いので，燃やさずそのまま埋めるんだよ。」

これはごみ処理施設見学の際の生徒の質問と担当の方の回答である。

アルゼンチンは日本から見て，ちょうど地球の反対側に位置する。日本から最も離れた国であるが，類似点も多く見られる。当然ながら相違点も多い。今回，相違点の１つとして，アルゼンチンのごみ事情について，１学期学習したことをもとに述べたいと思う。（総合的な学習の時間で，私の学級では環境問題に取り組み，アルゼンチンのごみ処理について調査し，施設の見学を行った）

アルゼンチンでは，ごみを分別しない。紙類・生ごみなど燃えるごみと，瓶・缶など燃えないごみ，電池などの有害ごみ，資源ごみ，その他すべてを一緒に出す。それらのごみはすべて埋め立て地へ運ばれ，埋め立てられている。

６月，総合的な学習の時間に，市内のごみ処理施設と埋め立て地の見学を行った。日本と違って焼却するための炉がないごみ処理施設では，収集車によって市内から集められたごみを圧縮し，大型トレーラーへと積み替えるのが主な仕事である。そこでは１日２３０トンのごみが処理されているとの説明であった。

ごみ処理施設見学のあと，次に向かったのが埋め立て地。それは市内から高速道路で約４０分の郊外にあった。入口付近は数年前に埋め立てられた場所で，芝生が植えられ，公園と様変わりしていた。そこからさらに奥へと進むと，目の前に現れたのは，現在の埋め立てられている現場。その光景はまさにごみの山である。大型トレーラーの荷台から降ろされたごみは，ブルドーザーでごみの山の頂へと運ばれていく。上空には，空を覆い尽くすほどの鳥が，舞っている。有害ごみも含まれたごみを食料としている鳥には害はないのだろうかと心配になった。地下水など環境への影響も心配されるが，埋め立てる前に底に厚いビニールを張ってあるので，問題はないとの説明であった。

インターネットで調べてみると，ごみの収集方法，処理，リサイクルの取り組みは国によって様々である。海外教育施設のネットワークを活用して，生徒同士が情報を交換出来れば，さらに今回の学習が深められそうである。

ホーチミン日本人学校　教諭　人見　実俊
同　　教諭　八木　友則

こちらで生活を始めて早くも半年がたち，仕事や生活にもようやく慣れてきました。心配していた当地での食生活は意外と私達の口に合い，日本と同じ米文化のベトナム料理は抵抗なく受け入れられました。しかし赴任当初は日本との違いばかりが目に付き，衛生環境や習慣，文化の違いに困惑する日が多かったように思います。道路で平然と用を足す人，土産を売りつける子供，逆走するバイク，遠回りをするタクシー・・・・ついつい頭の中に「日本だったら」というフレーズが浮かぶことが度々でした。しかしそれは私達が日本というメガネを通してベトナムを見ていたと言うことに気が付きました。現在はベトナムの生活に慣れたといえばそれまでですが，少しずつ自分の見方が日本というメガネからベトナムのメガネに変化しつつあるという実感があります。いろいろな国のメガネを持てること，それが本当の国際理解ではないかと思い始める今日この頃です。今後もこの国で貴重な経験を積んでいきたいと考えています。

日本人学校

地元の市場

行商のおばちゃん

果　物　屋

「ジャカルタに赴任して」

ジャカルタ日本人学校　教諭　山田　聡

私が赴任したジャカルタ日本人学校（ＪＪＳ）は，今年創立３４年目を迎える伝統ある日本人学校です。児童・生徒数は小中合わせて約８５０人が在籍しています。施設では世界最大級の日本人学校です（プール２つ・グラウンド２つ・体育館２つ等）。ＪＪＳでは，インドネシア理解教育（総合的な学習での実践）や小学部1年生からの英語教育を取り入れています。また，インドネシアは赤道を挟んだ所に位置するので，年間を通して水泳の

授業を行っています。職場も３０～４０代前半の教諭が非常に多く，日々日本各地から集まった４０名程の先生方と切磋琢磨して頑張っています。

生徒の通学は，学校が都心から離れた所にあり，渋滞もひどいため，スクールバスや自家用車で平均１時間かかって学校にきています。また，我々日本人は，治安面や生活の違いから，運転手やメイドさんを雇って日々の生活をしています。学校内にも多くのカリワヤンさん（労働者）がおり，学校内の掃除や管理修繕に至るまで仕事を手伝ってくれます。（慣れない外国での生活にはありがたい存在です。）

・・とここまでは，恵まれたことばかりを書きましたが，1998年の暴動以後，昨年のバリ島での爆弾テロ事件，そして今年８月のマリオットホテルの爆破事件，来年行われる大統領選挙に向けてのデモ活動と決して治安面では安心出来ない日々が続いています。日本での当たり前だった生活を再認識する所から，私のジャカルタ生活が始まりました。ここＪＪＳの子ども達は，体育祭・文化祭等の学校行事に日本以上に頑張って取り組んでいます。こんな情勢の中でも今はただこのジャカルタの地で，今後これまで通り安全に教育活動が続けられることを祈るばかりです。

我々が出会うインドネシアの人々は，気さくで大らかな方ばかりのですが・・。

サンパウロにて

サンパウロ日本人学校　教諭　根本　英生

私が，ここブラジルのサンパウロ市に日本人学校の教員として派遣されて，約半年が過ぎようとしています。

初めての海外での生活。海外旅行も進行旅行で一度行ったきりの私が，どんな生活を送るのだろう，どんな子どもたちと出会うのだろうと，楽しみでもあり，勿論，不安でもありました。家庭生活を支える妻は，私以上に不安を抱えていたに違いありません。

ブラジルと聞いてアマゾンを連想した方は熱帯地方と思われるかもしれませんが，日本の真裏に位置し，海抜八百メートルの高原につくられた都市サンパウロは，ずっと涼しく生活しやすいところだそうです。確かに太陽の日差しの下ではかなり暑いのですが，日陰に入り風が抜けると，気持ちよく過ごせます。また，サンパウロの冬（八月前後）は予想以上に寒くて驚きました。

何よりも驚くべきことは，ブラジルという国の多様さだと思います。例えば，サンパウロは日系移民の都市でもあり，東洋人街と呼ばれるところへ出かければ，たくさんの日本語の看板が目に飛び込んできて，日本にいるのかと錯覚しそうになりますし，フェイラと呼ばれる市へ出かければ，日本語の通じる人が何人もいることに驚かされます。ブラジルには，古くからこの地に住んでいたインディオ，ヨーロッパから渡ってきたポルトガル人，アフリカ，イタリア，スペイン，ドイツ，そして日本から移住してきた人々など，たくさんの人種が混ざり合って生活しています。言葉の通じない私たちに対しても，本当に気さくに，そして親切に話しかけてくれることが印象的です。

しかし，残念なことに貧富の差が激しく，強盗や誘拐などの犯罪が多発していることも事実です。そして，学校に通うことのできない子どもたち，路上で暮らす子どもたちもいます。その事実から目を背けて生活することはできません。

日本人学校に通う子どもたちは，ブラジルが大好きです。そして日本に暮らす子ども以上に日本に対しての思い・関心が高いように感じます。私も家族もブラジルでの生活に慣れてきました。私

が子どもたちと何を学んでいけるかは，まだまだ分かりませんが，肌の色が違っても，話す言葉が違っても，人を思いやる気持ちは世界共通。子どもたちに負けない広い視野で物事を考え，見られるようになりたいと考える毎日です。

アグアスカリエンテス日本人学校　教諭　須藤　貴憲

「アグアスカリエンテス？」「それはどこの国？」「なかなか覚えられない地名だね」赴任前，多くの友人から同じことを言われました。初めて赴任地を耳にしたときの私も同じでした。そこでまず，日本人学校があるアグアスカリエンテス市について説明します。

アグアスカリエンテス市は，メキシコ合衆国の中央部に位置し，首都メキシコシティから北西に約五百五十キロ離れたアグアスカリエンテス州の州都で，人口約六十五万人の都市です。標高千八百七十メートル，花と緑に囲まれた静かな環境にあります。自動車生産関連企業が十数社進出して，在留邦人は約四百人を数えます。メキシコのスイスと呼ばれています。少しはイメージがわいたでしょうか？

日本人学校は，平成九年四月開校の新しい学校です。小学部二十三人・中学部八人が，兄弟姉妹のように仲良く生活しています。私は，小学部二年生の担任をしながら，中学部二・三年の授業も担当しています。メキシコはスペイン語が公用語です。そのため，総合的な学習の一環として，小一から中三まで週二時間，スペイン語の学習をしています。現地人講師と担任がＴＴで授業を進めます。私はまだスペイン語は不得意ですが，失敗を繰り返しながら格闘しています。

小規模校なので，小一から中三までが一緒に活動することが多く，部活動と林間学校がその代表です。縦割りで活動することによって，お互いに助け合い，相手を思いやる心が育ちます。それぞれの学年が自分の立場を考えて行動します。また，現地校との交流も盛んで，運動会では競い合います。

一　ブーゲンビリヤ青い空　　二　紫薫るハカランダ
　故郷離れ肩を組み　　メキシコ日本手をつなぎ
　強く正しくあたたかく　　希望を胸にはずませて
　共に学ぼう育てよう　　共に燃えよう羽ばたこう
　ここアグアスのわが母校　　ここアグアスのわが母校

これは，本校の校歌です。この歌詞のように素晴らしい学校に赴任でき，とてもうれしく思います。茨城県からの新しい風が吹くように，これからも頑張ります。

※　林間学校

乗馬体験

小１から中３までが協力して食事づくり

※　学校

校舎　　メキシコといえばサボテン（校庭にあります）

『世界を結ぶ架け橋に』

ロンドン日本人学校　教諭　塙　智子

英国では，自己表現の訓練としての教育に「ドラマ教育」というものがあります。これは，俳優の訓練に使われている手法を応用して，生徒や学生の表現意欲を高め，コミュニケーション能力の向上をめざすものです。通常，中等教育から始まりますが，初等教育から導入している学校もあります。英国の人々は，言葉だけでなく，表情やジェスチャー等，全ての表現を使ってコミュニケーションを図っています。表現力豊かな英国人の中で生活していると，21世紀の国際社会を担う子ども達に，異文化に通じる自己表現力を付けていくことの大切さを感じます。

ロンドン日本人学校では，昨年度より「国際コミュニケーション能力」の育成を目指して，英語教育，英語活動はもちろん，各教科・領域にも視点をあて，研究を進めています。在外ならではの活動の一つとして，小学部１年生より週に３時間，英語学習を実施しています。ネイティブとの英会話学習，担任とネイティブがＴＴで行う英語活動，文化比較力や表現力の向上をねらった教科における授業開発等，多方面から国際コミュニケーション能力を育成しようと試みています。また，本校は１０校の現地校と交流をしています。コミュニケーションを図るために，英語の力をつけることも大切ですが，知ってる限りの英語で，自分の思いを伝えようと一生懸命な子供達の姿は，表情やジェスチャーのような身体表現が大きな役割を果たすこと，「伝えたい」という強い思いが現地の子ども達との心の通い合いを生むこと等，言葉以外の表現力の大切さに気付かせてくれます。表現力豊かな人々がたくさんいる英国でだからこそ感じることができる，気付くことができるという表現力の育成を図っていきたいと思っています。勿論子ども達は，現地の子ども達と交流し，「伝わった！」という感動から，さらに英語への習得意欲を高めたり，異文化や日本文化を見つめ直したりと国際人としての資質も向上させています。校歌に「世界を結ぶ架け橋に」という歌詞があります。この歌詞にもあるように，夢を託せる子ども達と共に，私自身も豊かな自己表現力を身に付け，「世界を結ぶ架け橋」

となれるよう，ここロンドン日本人学校にいることの意義を改めて考えています。

ジェッダ日本人学校に赴任して

ジェッダ日本人学校　教諭　雨貝　康雄

サウジアラビアのジェッダ市は紅海に面し，イスラム教の聖地メッカに近い商業都市です。現在は２００万人を超える人口を有します。また，ヨーロッパからの観光客やメッカへの巡礼者が多数訪れる都市でもあります。意外に思われるかもしれませんが，雨は降らなくとも紅海の発する水蒸気で湿度が高く，水道管を配した道路沿いや公園は緑が豊かです。一年を通して暑いのですが，特に夏季は温度計を日当たりの良いところに置いておくと，５０度の目盛りを振り切ってしまいます。

さて，本校は現在小学部１２名，中学部１名，日本人教師６名の小規模校です。児童・生徒へのきめ細かな個別指導を重視しながら，日本人学校の特色を生かした教育活動を行っていこうとする校長先生を始め意欲満々の先生方の姿に，大いに刺激される毎日です。

本校では現地理解教育として，主に総合的な学習の時間を利用し，この国の言語や自然・文化等の学習を行っています。言語学習では小学１年生から英会話の授業を，小学３年生からアラビア語の授業を実施しています。今年度から新たに「朝の英会話」を開始しました。これは毎朝始業前の１０分前，本校自作のVTRを利用して習熟度別に日常会話の学習を継続して行うものです。また，自然・文化などの学習について，小学３年生以上では「砂漠の人々の生活」「サウジアラビアの生き物」「ゴミ処理の仕方」など，自分のテーマを調査・探求していく「アラビックタイム」を週１時間実施しています。さらに日本文化の理解にも力を入れ，鯉のぼり集会などの季節感のある行事や百人一首大会を行っています。

前述の通り，非常に暑い地域ですので，体育の授業内容には制約がある反面，５～１０月は水泳ができます。そのためだれもが泳げるようになり，高学年児童・生徒のフォームは見事なものです。９月の日本人会主催の水泳大会では大活躍します。

サウジアラビアは，制度上・安全上，日本とは大きく異なり，施設見学や校外学習の実施に限界がありますが，紅海への遠足では美しい珊瑚礁や熱帯魚（タコが大人気）を観察したり，スクールステイ（校内での１泊２日の宿泊学習）で友情を深めたりすることができました。私はこの地の特色を生かし，国際的な広い視野と日本人の美しい心を持った子どもたちの育成をめざして，これからも指導にあたっていこうと思います。

あ　と　が　き

来年８月２６日に，本県つくば市で第１５回関東ブロック全国海外子女・国際理解教育研究大会が開催されます。前回の開催は，平成８年，第７回大会でした。大会テーマ『国際的に信頼され，国際社会に主体的に生きる日本人の育成』の下，関東都県，さらには全国からたくさんの方をお招きして開催したのでした。平成８年というと，１月に橋本内閣が発足し，その１２月には，ペルー日本大使公邸人質事件が勃発した年です。しかし，それから７年が過ぎ，世界の情勢は大きく変わりました。

今日，世界のグローバル化はますます進んでいます。しかし，一方で国家間，民族間の紛争は世界各地で依然として頻発しています。そのような中で，先日の，イラクでの日本人外交官殺害事件は，私たちに大きな衝撃を与えました。

海外における国際貢献には様々な形があります。今，日本がどのような形で貢献することができるのかということについては，もう一度考える時期に来ているのでしょう。そして，茨海研の私たちにできることは，自分たちの住む郷土の文化や伝統を愛し，国際的な視野に立った，自立した人間として，様々な問題を自らの智恵で解決できる日本人を育てることなのではないでしょうか。来年の茨城大会が発信するメッセージが，全国へそして世界へと広がることを期待します。

さて，最後になりましたが，今回の広報誌発行にあたり，お忙しい中，快く原稿依頼にお応え下さった方々，ありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

なお，広報誌に関するご意見は，下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。

(y-morisaku@rose.zero.ad.jp)　（文責　森作）